

「到達目標2011」に学ぶ C Q I 戦略

千葉大学大学院看護学研究科
附属看護実践研究指導センター

黒田 久美子

吉田 澄恵、和住 淑子、野地 有子、錢 淑君、吉本 照子



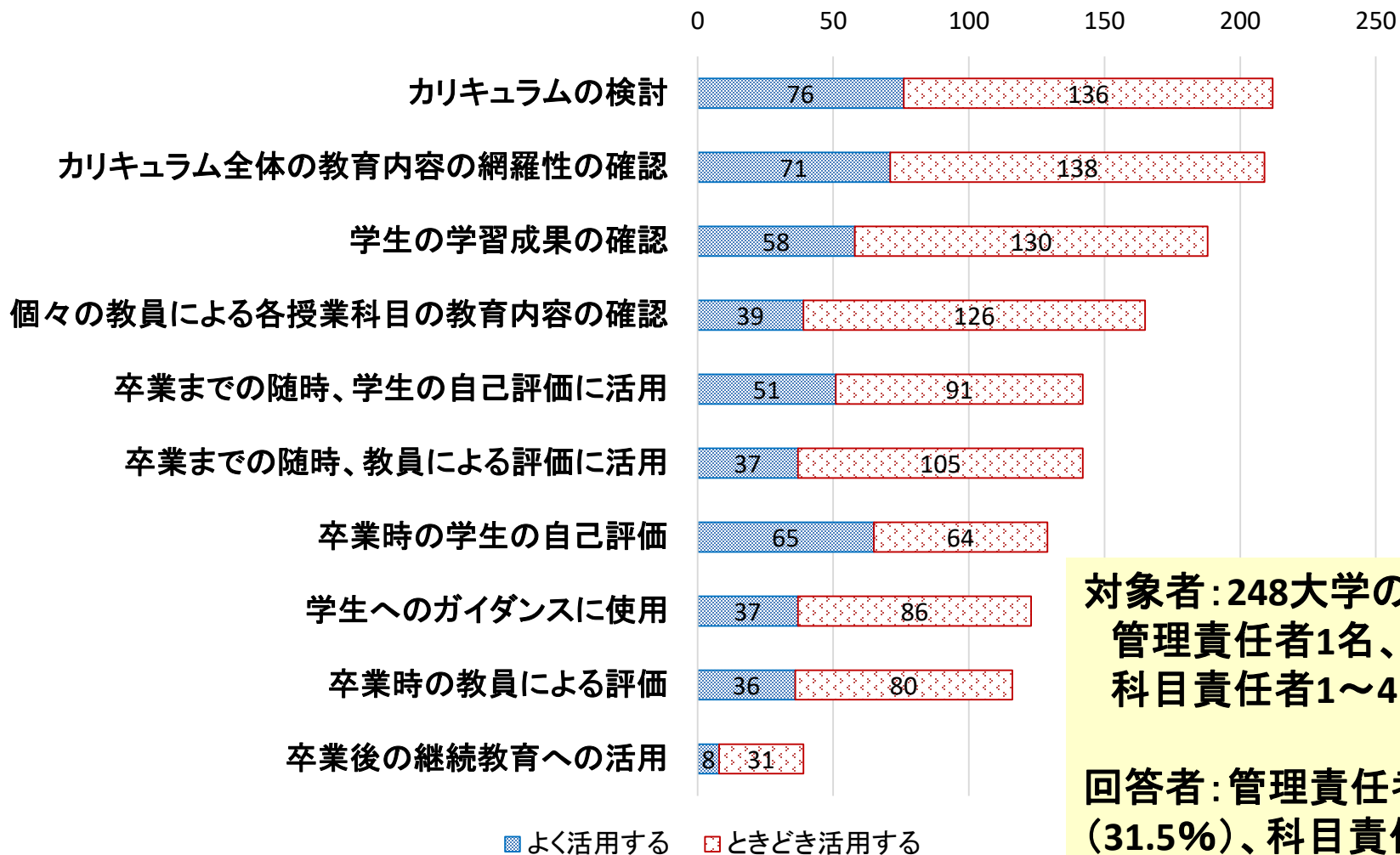
本日の報告内容

- 2011年3月 「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標(以下、「到達目標2011」)」提示
- 各看護系大学は、CQIを推進するために、どのように「到達目標2011」等の外部指針を活用したらよいか
- 文部科学省委託事業(平成27～29年度)
「医療人養成の在り方に関する調査研究」
学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発
- その調査結果、及び昨年度のワークショップの経験から、外部指針の活用方略を提言



「到達目標2011」の活用実態からみた活用方法

「到達目標2011」を活用していると回答した246名における活用方法(複数回答)



対象者: 248大学の
管理責任者1名、
科目責任者1~4名

回答者: 管理責任者78名
(31.5%)、科目責任者
260名(26.2%)

「到達目標2011」のその他の活用方法 (自由記述)

1. 看護以外の専門領域と看護学の到達目標として共有し、全学的な教育の自己評価に活用
2. 個別科目の教育内容および大学全体の教育内容の確認、アドミッションポリシー(AP)・カリキュラムポリシー(CP)・ディプロマポリシー(DP)との整合性等の全体的な確認に活用
3. 「到達目標2011」とDPを重ね合わせ、独自の到達目標の作成に活用
4. 学生と教員の相互評価の資料として活用
5. 臨地実習において学習成果の確認に活用
6. 科目間の位置づけを明確にする研究に活用
7. 大学での学びのイメージを高校生やその家族等に説明するために活用(オープンキャンパスや父母会等において)

「到達目標2011」を活用していない理由 (自由記述)のカテゴリー名

内容からは、「活用している」と判断される回答も多かった

1. 教員の周知・理解不足
2. 教員の関心・意識の低さ
3. 教員が現大学に着任・新任したばかりで活用に至らない
4. 新設大学であるため必要性がまだない
5. 大学の体制が整わず活用には難しい状況
6. 大学組織の優先的検討課題ではない
7. **大学のDPやCPに反映されているが、領域では活用していない**
8. 具体的ではなく評価には活用しにくい
9. **一部に参考にしてのみで、カリキュラムに反映させていない**
10. **大学独自のものがある
(「到達目標2011」と照合して反映している・していない)**
11. **活用していないが参考にはしている**

「到達目標2011」の活用の実施と 「卒業時到達目標」の実施、質確保のための取り組みとの関連

「到達目標2011」の活用	卒業時到達目標評価の実施		
	実施している	どちらともいえない	実施していない
活用している	139 (57.7%)	43 (17.8%)	59 (24.5%)
活用していない	28 (31.8%)	18 (20.5%)	42 (47.7%)
p=0.000	n=329		

「到達目標2011」の活用	看護学教育の質確保のための取り組み		
	できている	どちらともいえない	できていない
活用している	149 (61.3%)	74 (30.5%)	20 (8.2%)
活用していない	38 (44.2%)	29 (33.7%)	19 (22.1%)
p=0.001	n=329		

平成28年度ワークショップ参加者における 参加後の活用から学ぶーweb調査結果

- 28名入力、うち二次使用承諾者26名
- 「到達目標2011」を参加前から活用していた 14名
 - 内容をよく確認した **10名**
 - 自大学のカリキュラムと照合 **11名**
 - 自分の担当領域と照合 **11名**
 - 自大学の卒業時到達目標と照合 **7名**
 - 他の教員と「到達目標2011」について話した **7名**
 - 学生と「到達目標2011」について話した **1名**
 - 保健医療福祉機関の関係者と「到達目標2011」について話した **1名**
- 「到達目標2011」を参加前は活用していなかった 12名
 - 内容をよく確認した **5名**
 - 自大学のカリキュラムと照合 **7名**
 - 自分の担当領域と照合 **6名**
 - 自大学の卒業時到達目標と照合 **6名**
 - 他の教員と「到達目標2011」について話した **9名**

内容をよく確認したり、
現在の教育内容の点
検に活用していた

他の教員と「到達目標
2011」について話した
人が多かった

平成28年度参加者の 参加後の「到達目標2011」活用で気づいた内容

<自由記載の一部>

- (参加前活用なし) 次年度からのDPやCPの改定中に何度となく話題に上がり、到達目標2011を意識したものとなっていると思った。以前はそこまで気にしていなかった。
- (参加前活用なし) 自学のディプロマポリシーやカリキュラムポリシーには、一部、反映されているが不足している内容もあった。
- (参加前活用あり) 自大学の卒業時到達目標で大事にしていることが明確になった
- (参加前活用あり) 自大学の教育目標と到達目標2011を照らし合わせて齟齬はないものの、その教育活動や評価活動が、システマティックに行われていないことに気が付いた。
- (参加前活用あり) 学部内で卒業時到達目標について自由に話し合う機会をもつことの必要性を感じた。
- (参加前活用あり) 専門用語の概念、言葉の定義などを明確にしておかないと検討しづらい。

平成28年度参加者における 今後の「到達目標2011」活用に関する意向

<自由記載の一部>

- システマティックにかつ効果的に(教育を)行うためには、到達目標2011を十分に理解したうえで、4年間のどの時期にどのような内容を教授し、かつ積み重ねていくか、それらをシステマティックに評価する仕組み(教育評価マップ作り)に取り組んでいきたい。
- 現在、卒業時到達目標の達成状況はコアの部分のみ、自己評価してもらっているため、もっと詳細な評価と、カリキュラム、科目の内容にも反映したい。
- 大学独自の「卒業時までには到達すべき看護技術」のツールがあるが効果的に運用できていない。既存のツールの効果的な活用法の検討に取り掛かると共に、再度「到達目標2011」の各能力と本学が提示する技術項目について再吟味して項目の整理をする必要がある。さらに、教員はもとより(特に若い教員は理解が不十分のように感じる。)学生とも「到達目標2011」について話し、DPにもつなげるべく理解を深める機会が必要であると強く感じている。

「到達目標2011」のような 外部指針 活用への提言

- ① カリキュラム開発などの論拠として活用
- ② 教育の点検ツールとして活用
- ③ コミュニケーションツール(教員間、教員—学生間、教員—保護者等関係者間)として活用
- ④ 教育に関する討論の話題として活用(用いられている用語等の議論を通して、看護学教育に関する共通認識、理解に近づく)
- ⑤ 組織としてCQIに取り組むきっかけ、意識づけ、体系化に活用
- ⑥ 自大学で価値を置く理念や内容を外部指針との比較により確認